

揺るぎなき想い、そして未来へ



CENTRAL BAND
Japan Ground Self-Defense Force

陸上自衛隊中央音楽隊
第177回定期演奏会

2026
2.18 [WED] [開場] 18:15 [開演] 19:00
[会場] すみだトリフォニーホール 大ホール

SALUTATION

ご挨拶

本日は陸上自衛隊中央音楽隊第177回定期演奏会に

ご来場いただき誠に有難うございます。

今回の定期演奏会は「揺るぎなき想い、そして未来へ」と題し、

人々の信念や不屈の想いを題材にした作品を中心にお送りいたします。

困難に直面したとき、人は進むべき道を見失い迷います。

過去の動乱期にも混迷の中で多くの悲劇や不幸な出来事が起きました。

しかしそのような中でも、自身の危険を顧みず信念を失わず事に臨んだ人々がいます。

本日樽屋雅徳氏に委嘱し世界初演となる「ポラリス～闇を照らす勇気の光～」のモデル、

先の大戦において多くのユダヤ難民を救った樋口季一郎陸軍中將もその一人です。

時代の潮流に流されず、人道的精神と信念を貫いた彼の生き方には、

人類の希望の光を感じずにはいられません。

そして私たち自衛隊員が抱く使命感にも相通じるものがあると思うのです。

どうぞ今宵、不屈の想いが未来を照らす希望の光を中央音楽隊渾身の演奏でご堪能ください。

最後に、昨年11月にポーランドで開催された「ワルシャワ吹奏楽指揮者コンクール

(Warsaw Wind Band Conducting Competition 2025)」に参加し、

見事第1位に輝いた副隊長 柴田2佐の指揮にもご注目いただければ幸いです。

陸上自衛隊
中央音楽隊長 1等陸佐

志賀 亨

PROGRAM

プログラム

【第1部】

指揮：3等陸佐 鈴木 聡

1 行進曲「ナイルの守り」 / ケネス・ジョセフ・アルフォード
Army of the Nile / Kenneth Joseph Alford

2 スピリット・オブ・セントルイス / 清水 大輔
The Spirit of St.Louis / SHIMIZU Daisuke

3 オセロ / アルフレッド・リード
～5つの場面によるコンサートバンドまたはウィンドアンサンブルのための交響的素描
"OTHELLO" A Symphonic Portrait for Concert Band / Wind Ensemble in Five Scenes / Alfred Reed

第1楽章 前奏曲「ヴェニス」 - Prelude (Venice)

第2楽章 朝の歌「キプロス」 - Aubade (Cyprus)

第3楽章 オセロとデズデモーナ - Othello and Desdemona

第4楽章 廷臣たちの入場 - Entrance of the Court

第5楽章 デズデモーナの死、終曲 - The Death of Desdemona, Epilogue

【第2部】

指揮：2等陸佐 柴田 昌宜

4 中央音楽隊委嘱作品《世界初演》
ポラリス～闇を照らす勇気の光～ / 樽屋 雅徳
Polaris-The Light of Courage That Illuminates the Darkness / TARUYA Masanori

5 管弦楽のための「小組曲」 / ヴィトルト・ルトスワフスキ
Mała Suita / Witold Lutoslawski

6 ブリュッセル・レクイエム / ベルト・アッペルモント
A Brussels Requiem / Bert Appermont



〔司会者〕高坂 はる香 KOSAKA Haruka

大学院でインドのスラム支援プロジェクトを研究。その後ピアノ専門誌を経て、2011年よりフリーライター。ショパンコンクールなど国際ピアノコンクールも取材する。著書に「キンノヒマワリ ピアニスト中村紘子の記憶」(集英社刊)。

PROFILE

プロフィール

〔指揮者〕

副隊長 2等陸佐

柴田 昌宜

Executive Officer
LTC SHIBATA Masanori

大阪音楽大学卒業(トランペット)、同専攻科修了(指揮)。2003年、陸上自衛隊に幹部候補生として入隊し、第15音楽隊長(那覇)、中部方面音楽隊長(伊丹)を歴任。2023年から現職。ワルシャワ吹奏楽指揮者コンクール2025において第1位を獲得するとともに、モーツァルテウム音楽大学マスタークラスや東京藝術大学での研修など国内外で研鑽を積む。ワシントンD.C.での米国軍楽隊との共演やパプアニューギニア国防軍軍楽隊の育成支援など防衛交流にも貢献。日本コロムビアやブレーンからアルバムが出版され、故郷兵庫県加古川市の観光大使も務めている。これまでに、指揮を下野竜也、松尾昌美、夏田昌和、P.ギョルケ、作曲法を川島素晴の各氏に師事。



〔指揮者〕

演奏科長 3等陸佐

鈴木 聡

Director of Performance Division
MAJ SUZUKI So

1998年武蔵野音楽大学卒(ユーフォニアム専攻)、同年陸上自衛隊に入隊、第12音楽隊(相馬原)にユーフォニアム奏者として配属。2008年幹部に任官。2013年に第4音楽隊長(福岡)、2018年に第13音楽隊長(海田市)、2024年に中央音楽隊研究班長を経て2025年より中央音楽隊演奏科長の職にある。この間、パプアニューギニア国防軍軍楽隊の育成支援に従事するなど音楽による防衛交流に貢献。ユーフォニアムを三田村健、大房美穂、指揮法を大澤健一、大河内雅彦、三原明人の各氏に師事。

PROGRAM NOTE

プログラムノート

【第1部】

指揮：3等陸佐 鈴木 聡

1 行進曲「ナイルの守り」/ ケネス・ジョセフ・アルフォード

Army of the Nile / Kenneth Joseph Alford

イギリスのマーチ王ケネス・J・アルフォード(1881~1945)は英国軍楽隊隊長を歴任し、「ボギー大佐」「消えた軍隊」「銃声」など優美な旋律で親しみやすく格式ある行進曲を作曲した。実はこの名前、作曲家としてのペンネームで本名はフレデリック・ジョセフ・リケッツという。少年兵として軍隊に入隊し、現在の王立軍楽学校にあたる前身機関で教育を受け、海兵隊プリマス基地軍楽隊長まで勤め上げた根っからの軍人で、1944年に退役するまで数々の行進曲を捧げた。第二次世界大戦が勃発し、イギリスは枢軸国からの侵攻を北アフリカ戦線で食い止めるべく連合国の一員として戦い、勝利を収めた。エジプトでのイギリス軍の活躍を讃えアルフォードはこのマーチを作曲し、北アフリカ戦線司令官ウェーヴェル元帥に献呈した。しかし歴史が証明している様にイタリア、ドイツとの戦争が激化し、ヨーロッパ中を戦場と化した未曾有の大戦へと発展していった。この行進曲は勝利を讃えるには珍しく短調の重々しい曲調で展開される。まるで戦争をもたらしたものは勝利だけでなく、大きな代償もはらんでいることを暗喩しているかのようである。しかし曲の後半では長調に転じ、輝かしいファンファーレを伴い堂々たる勝どきを上げる。アルフォード最晩年の傑作行進曲である。

2 スピリット・オブ・セントルイス / 清水 大輔

The Spirit of St.Louis / SHIMIZU Daisuke

20世紀は「航空機の時代」と評される。1903年にライト兄弟が動力飛行に成功し、人類による自由な大空への挑戦が始まった。航空機の発展を加速させようと、米国の資産家レイモド・オルティエグが賞金(現在の貨幣価値で約2億円)を提示し、大西洋無着陸飛行の挑戦が始まった。飛行家のチャールズ・リンドバーグはミズーリ州セントルイスの人々から資金援助を受け、大西洋横断仕様の特注飛行機を発注し、その人々の希望と魂を乗せた愛機に「スピリット・オブ・セントルイス」という愛称を付けニューヨークを飛び立った。人類が初飛行を成功させてから僅か24年後の1927年5月、リンドバーグはニューヨーク〜パリ間、大西洋無着陸単独飛行という偉業を成し遂げ、航空機産業発展の礎となったのである。作曲者の清水大輔氏は横浜栄区民吹奏楽団の委嘱を受け、リンドバーグの果敢に挑戦する心、そしてその勇気を讃え、飛行機が生み出すスリリングな冒険心と偉業を達成した言葉に尽くせない高揚感を音楽で表現した。まるでハリウッド映画を彷彿させるような壮大な音楽は、私達を大空の冒険へ誘ってくれる。

PROGRAM NOTE

プログラムノート

【第1部】

指揮：3等陸佐 鈴木 聡

3 オセロ / アルフレッド・リード

～5つの場面によるコンサートバンドまたはウィンドアンサンブルのための交響的素描
“OTHELLO” A Symphonic Portrait for Concert Band / Wind Ensemble in Five Scenes / Alfred Reed

吹奏楽の表現を芸術の域にまで昇華させた作曲家 アルフレッド・リード(1921～2005)は、現代の吹奏楽界に大きな影響を与え続けている。1974年、マイアミ大学で教鞭を振るっていたリードは、16人の金管奏者と打楽器のために14曲から構成される「オセロ」の劇付随音楽を作曲し上演した。残念なことに現在この楽譜は所在不明となっている。後に吹奏楽発展のため創設されたウォルター・ビーラー記念委嘱シリーズとして依頼を受け、1977年に5つの組曲として吹奏楽版にアレンジし、自ら指揮を執り初演した。シェイクスピア4大悲劇の一つ「オセロ」は、巧みな心理描写から紡ぎ出される人間の嫉妬心、愚かさ、破滅の悲劇を表現した現代でも色褪せることのない傑作である。ボードゲームの「オセロ」の由来となっており、次々と移り変わる人間の善悪、心の白と黒のせめぎ合いが由来とされている。主人公オセロは気高く高潔なムーア人(北アフリカのイスラム教信徒)で、キプロス島の指揮官として軍隊を率いていた。若く優秀な腹心キャシオーを取り立てたため、それに嫉妬した古参の旗手イアーゴーは謀略を企て、オセロが愛する妻デズデモーナの不貞という嘘をでっち上げた。真偽が分からない中、オセロは妻を愛するが故の嫉妬という感情に飲み込まれ、ついに自ら妻を手に掛けてしまう。直後、イアーゴーの謀略と妻の潔白を知ったオセロは、絶望し自らの刃により命を絶つ。救いようのない悲劇ではあるが、シェイクスピアが残した珠玉の言葉は時代を超え、現代の人々の心を揺さぶるのである。組曲は5つの場面から構成されており、リードは楽譜に注釈で場面描写を書き込んでいる。

第1楽章 前奏曲「ヴェニス」- Prelude (Venice)

「習慣とは恐ろしきもの。戦の庭にあっては石を枕に鋼を床にしまりました。我が身には、今や戦場こそよなき羽毛の寝床でございます」物語の悲劇を予感させる強烈なファンファーレとおどろおどろしい伴奏、勇壮なオセロの力強い演説が想起される。中間部では3楽章で使われるデズデモーナとの愛の旋律も垣間見え、ここから始まる悲劇を暗示させる楽章となっている。

第2楽章 朝の歌「キプロス」- Aubade (Cyprus)

「おはようございます、将軍殿」オーバード(Aubade)とは朝の音楽、夜明けの歌のこと。オセロとデズデモーナが眠る寝室の窓辺に副官のキャシオーが楽隊を連れて目覚めの音楽を届けに来る。1楽章とは一転、軽快で爽やかな印象を与えるこの楽章は、16世紀の世界観と当時の楽隊を思い起こさせる古風な楽想であり、2人が幸せだった頃の一場面を想像させる穏やかな楽章。

第3楽章 オセロとデズデモーナ - Othello and Desdemona

「私の過去の苦難を彼女は哀れんでくれた。だからこそ私は彼女を愛したのです」2人の深く情熱的な愛を表現している楽章だが、オセロがヴェニスの議官に対していかにしてデズデモーナを愛するに至ったかを弁明する場面が描写されている。甘美な愛に堕ちていく2人は、やがて悲劇へと続く破滅的な暗闇へと落ちていく。

第4楽章 廷臣たちの入場 - Entrance of the Court

「見よ、ヴェニスの獅子を！」オセロを讃えるためヴェニスから到着した廷臣達の絢爛豪華な入場のファンファーレが鳴り響く。しかし、妻の不貞を疑うあまり憤怒と嫉妬に狂い、我を失ったオセロはデズデモーナを罵倒し、殴り飛ばしてしまう。公衆の面前でこれを見たイアーゴーは「あれがヴェニスの獅子か！」と嘲笑う。荘厳な音楽により興奮と緊張感が最高潮となり、終幕へと向かっていく。

第5楽章 デズデモーナの死、終曲 - The Death of Desdemona, Epilogue

「お前を殺す前に口づけをしてやった。こうするより他は・・・」自らの手によりデズデモーナの命を奪ってしまった直後、オセロは真相を知り茫然自失の中、深淵の闇へと落ちていく。全てを失ったオセロの中に蘇る在りし日の愛しい妻の姿。しかしその回想は重苦しい短調の響きと不協和音によって陰鬱な世界へとゆがめられていってしまう。デズデモーナの屍に口づけを交わし後を追うように自害するオセロ。逃れることのできなかつた哀しき運命を見届け、静かに悲劇の幕が下りる。

PROGRAM NOTE

プログラムノート

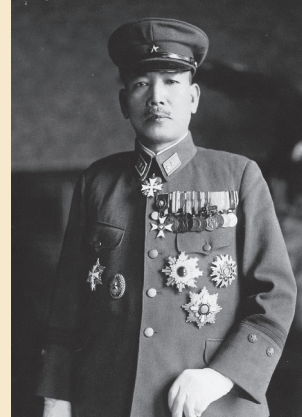
【第2部】

指揮：2等陸佐 柴田 昌宜

4 中央音楽隊委嘱作品《世界初演》 ポラリス～闇を照らす勇気の光～/ 樽屋 雅徳

Polaris-The Light of Courage That Illuminates the Darkness / TARUYA Masanori

第二次世界大戦の混乱の中、絶望に追い込まれたユダヤ難民を救った一人の日本人がいました。陸軍中將・樋口季一郎——その勇気ある決断と人道精神は、命を賭して人々を守り抜いた「暗闇に輝く灯火」として、今もお語り継がれています。本作品は、その歴史的事実を音楽で描き出す吹奏楽曲です。冒頭では、迫害から逃れ、苦難に満ちた旅路を歩むユダヤ人難民の姿が重苦しい響きで表現されます。やがて、彼らを救うために奔走する樋口季一郎と、彼を支えた人々の勇気が力強い旋律となって立ち上がり、闇を切り裂く光のように響き渡ります。緊張と葛藤の中に差し込む一筋の旋律は、希望の象徴であり、人道的精神の輝きです。そして終結部では、祈りにも似た荘厳な音楽が広がり、平和への願いを高らかに歌い上げます。タイトルにある「ポラリス」とは北極星を意味します。古来より旅人や航海者にとって進むべき道を示す星であり、暗闇の中で唯一輝き、人々を導いてきました。樋口季一郎の勇気ある行動もまた、絶望の闇に迷う人々を導いた灯火であり、その光は今も私たちに「勇気ある行動が未来を照らす」という普遍のメッセージを伝えています。この作品を通じて、樋口季一郎の勇気と人道精神に触れ、平和への祈りを新たにしていいただければ幸いです。（樽屋雅徳）



樋口 季一郎 (1888-1970)

HIGUCHI Kiichiro

樋口季一郎(1888-1970)は兵庫県淡路島に生まれた旧日本陸軍の中將である。陸軍大学校卒業後、語学力と国際感覚を評価され、情報・対外関係分野を中心に要職を歴任した。1930年代後半、国際情勢が緊迫する中で満州に赴任し、国家政策と人命が鋭く交錯する現場に立つ。1938年から39年にかけて、ナチス・ドイツの迫害から逃れたユダヤ難民が満州への入境を試みた際、ハルビン特務機関長であった樋口は、明確な上級命令が示されない中、人道を優先し通過を容認した。その結果、約2万人の命が救われ、後に「ヒグチ・ルート」として国際的に評価される。

終戦期には第5方面軍司令官として北海道・北方地域の防衛を指揮し、ソ連軍上陸の危機に際しても無用な衝突を避けつつ防衛態勢を維持し、北海道を戦火から守ったとされる。



樽屋 雅徳 TARUYA Masanori

1978年千葉県銚子市生まれ。武蔵野音楽大学音楽学部作曲学科卒業。佐藤博、宮本良樹各氏に師事。フランスで吹奏楽曲「Ardent Overture」を出版。代表作として「絵のない絵本」「民衆を導く自由の女神」「マゼランの未知なる大陸への挑戦」「マドックからの最後の手紙」「斐伊川に流るクシナダ姫の涙」などがある。全国の吹奏楽団やマーチングバンドからの委嘱も数多く、その作品の多くが国内外問わず広く演奏されている。作曲・編曲の傍ら、吹奏楽指導やコンクール等の審査員、執筆活動などでも多くの成果を挙げている。

陸上自衛隊中央音楽隊の知りたい情報が、すぐ見つかる
公式Webサイトが新しくなりました



演奏会情報を分かりやすく掲載
スマートフォン対応で見やすく

最新の活動情報を随時更新



PROGRAM NOTE

プログラムノート

【第2部】

指揮：2等陸佐 柴田 昌宜

5 管弦楽のための「小組曲」 / ヴィトルト・ルトスワフスキ

Maia Suita / Witold Lutoslawski

ポーランドは幾度となく国土を支配され他国に干渉され続けた歴史を持つ。第二次世界大戦では、ナチス・ドイツとソビエト連邦に侵略され占領されることとなる。ヴィトルト・ルトスワフスキ(1913~1994)の人生は激動のポーランドと共にあった。首都ワルシャワより北部の自然豊かな地主の子として生まれるが、国土を蹂躪される戦争に翻弄され続けた。しかし、ルトスワフスキは音楽家への道を歩み続け、ワルシャワ音楽院においてマリシェフスキ(リムスキー=ニコルサコフの弟子)に師事しその才能を開花させた。戦後、荒廃した祖国復興への想いから、ポーランドの民族音楽を用いた作品などを多数作曲し祖国再建に尽力した。しかし、ソ連の影響下にあったポーランドは、社会主義のための思想芸術を押し付けられ、ルトスワフスキが目指した音楽は反社会的なレッテルを貼られ強く批判を受けることとなる。そんな混沌とした社会情勢の中、1950年に作曲された作品がこの「小組曲」である。同世代の作曲家ショスタコーヴィッチと同様に当局からの強い圧力の下作曲活動を強いられていたが、巧みに民族性を取り込み自らの語法で類稀な傑作を生み出していたのである。ワルシャワ放送局からの委嘱により作曲され、主題となるテーマはポーランド南東部のマチュフ村の民族音楽から引用されている。

Fujarka (笛)

「Fujarka(フヤルカ)」はポーランドの民族楽器で、強烈な響きを出す笛である。ピッコロを主役として引き立て、可愛らしさと荒々しい民族性が混在する。

Hurra Polka (万歳ポルカ)

ポルカは19世紀中頃に流行したボヘミア地方発祥の二拍子の舞曲。「ポーランド娘」を意味するチェコ語が語源とする説がある。軽快なリズムと疾走感が織りなす爽快な楽章。

Piosenka (歌)

素朴な旋律でありながら、半音階的に絡みついてくる伴奏が、陰鬱として抑圧的な印象を残す。

Taniec (踊り)

群衆が豊かな大地で舞うような躍動感溢れる旋律から始まり、中間部は重厚なメロディが組曲の終わりへと力強く誘って行く。

本作品は、副隊長 柴田2佐が“第1位”の栄冠に輝いた「ワルシャワ吹奏楽指揮者コンクール2025」の本選課題曲である。

6 ブリュッセル・レクイエム / ベルト・アッペルモント

A Brussels Requiem / Bert Appermont

美しい街並みと中世の面影が共存し、EU本部が置かれ「欧州の首都」とまで称されるベルギー首都ブリュッセルにおいて、2016年3月連続爆破テロ事件が発生した。後にイスラム過激派のテロ組織が犯行声明を出した。ブリュッセル国際空港やEU本部近くのマールベルク駅で爆発、発砲が相次ぎ、実行犯3人を含む35人が死亡、340名以上が負傷するというベルギーにとって戦後最悪のテロとなってしまった。現代の吹奏楽を牽引する作曲家の1人 ベルト・アッペルモントは、母国ベルギーの惨状に深く心を痛めたことであろう。同年オーストリアの英国式ブラスバンド「ブラスバンド・オーバーエスターライヒ」から委嘱を受け、2017年のヨーロッパ・ブラスバンド・チャンピオンシップで初演された。その後、作者自身の手により吹奏楽に編曲され、2018年頃から日本の吹奏楽コンクールにおいても注目を集め、高難度の楽曲として絶大な人気を得た。作曲にあたり、事件そのものを痛ましく描写するのではなく、テロによって引き起こされた恐怖、悲しみ、怒りと絶望、しかし、残された希望と信仰への人々の内面を表現しようと試みた作品となっている。曲は連続する4つの楽章で構成されている。

Innocence (罪もなく)

冒頭クラリネットによって事件が起こる前の穏やかで平和な日常が描き出され、呼応するようにフランスの童謡「月の光に」が穢れない無垢の象徴として表現される。ベルギーはフランス語が公用語であるためこの童謡が引用された可能性もあるが、この童謡が最後まで重要な主題として楽曲全体を支配していく。

In Cold Blood (冷酷に)

場面は一転激しい強奏と鋭い音楽により人々の混乱や恐怖、怒りや負のエネルギーが充満する。止めどなく押し寄せる音の中に人々の感情が幾重にも覆い被さり、重くのしかかって来るようである。最後には打楽器により弔意の鐘が鳴らされ静けさの中へと引き戻されていく。

In Memoriam – We Shall Rise Again (追悼—我ら甦らん)

遠くから鳴り響くトランペットの旋律、そして低音が奏でる重々しい哀しみの鎮魂歌。心の奥底に沈み込んだ暗闇をなぞるような旋律は、各楽器に歌い繋ぐ手が経路する度、徐々に希望の色を携え音楽は新たな一歩へ向け動き出す。

A New Day (新たな日)

躍動するリズムを取り戻し、明るい未来を見出すかのようにジャズテイストの楽句が各楽器で奏でられていく。悲しみや恐怖、怒りや絶望、言葉にできない様々な感情を全て内包するかのようになり、各楽章のテーマを随所に散りばめながら、人間が強く生きて行く姿を怒涛の勢いで表現していく。そして最後には童謡「月の光に」が希望の象徴として力強く響き渡り、世界を輝かしく照らし出す。

ワルシャワ吹奏楽指揮者コンクール2025において 柴田昌宜2等陸佐が第1位を受賞しました

中央音楽隊副隊長 柴田昌宜2等陸佐は、2025年11月27日～29日にポーランドの首都ワルシャワで開催された「ワルシャワ吹奏楽指揮者コンクール2025」に参加し第1位を受賞しました。本コンクールは2年に一度開催され、今回は世界各国から第1次審査(ビデオ審査)を通過した約30名が集まり、フレデリック・ショパン音楽大学を会場に、第2次審査(ピアノ2台に対する指揮)、第3次審査(管楽アンサンブルへの指揮・リハーサル)を経て、ファイナルが行われました。ファイナルステージには日本人3名を含む5名が選出され、コンクールのために書かれた新曲「SVIATVID」と、ルトスワフスキ作曲の「小組曲」が課題となり、ポーランド陸軍軍楽隊に対するリハーサルと演奏指揮が審査され、その結果見事柴田2佐が第1位を獲得しました。

Congratulation



第1位
柴田 昌宜
SHIBATA Masanori

「このように素晴らしい賞を受賞でき本当に光栄に存じます。世界から経験豊富な指揮者が集まったコンクールでしたのでまだ信じられない思いです。クラシック音楽の本場ワルシャワの地での挑戦は長年の夢でした。指揮だけでなく英語でのリハーサルなど、たくさんの壁がありましたが、自分のベストを尽くして臨むことができたと思います。各審査のステージが終了するごとに通過者の名前が呼ばれる方式でしたので、毎回胸が張り裂けそうな緊張がありましたが、プレッシャーを音楽が奏でられる喜びに変えて表現しようと、結果ではなく演奏そのものに集中することを心がけました。今後この経験をもとに、日本のみならず世界に向けて平和と感動の音楽を届けられるような活動を目指してまいります。最後に、本挑戦に際し中央音楽隊の仲間からたくさんの激励と協力を受けて挑戦できたことに心より感謝申し上げます。」



次回
定期演奏会の
お知らせ

陸上自衛隊中央音楽隊 第178回定期演奏会
【創隊75周年記念】
2026年6月18日[THU] [開場]18:00 [開演]19:00 [会場]東京芸術劇場

詳しくはホームページをご覧ください
<https://www.mod.go.jp/gself/central/band.html>

アンケートにご協力ください
左記のQRコードよりアンケート記入ページへお進みいただけます。

陸上自衛隊中央音楽隊は、SNSもやっています。いいね、フォローお願いします。

MEMBERS

隊員

- 隊長 1等陸佐 **志賀 亨**
 副隊長 2等陸佐 **柴田 昌宜**
 演奏科長 3等陸佐 **鈴木 聡**
 最任上級曹長 准陸尉 **淺野 剛**

Concert Master

- 陸曹長 植竹 友和

Flute

- 陸曹長 我妻 日和
 2等陸曹 川上 和巳
 小山 志織
 3等陸曹 大橋 千晶
 加藤 くるみ
 中澤 有里
 陸士長 大道 詠亮

Oboe

- 2等陸曹 大西 清香
 恒松 勇希
 3等陸曹 今井 花音
 茂木 希

Bassoon

- 2等陸曹 岩田 昌子
 3等陸曹 田中 麗子
 藤澤 有里

Clarinet

- 准陸尉 野口 雄二
 野口 まり
 陸曹長 大町 充
 1等陸曹 片山 香織
 山田 佑一
 東 千尋
 2等陸曹 森園 綾子
 平賀 友紀
 村瀬 和也
 奥田 和希
 柴田 ちはる
 村瀬 美月
 (中部方面音楽隊) 西川 宏祐
 3等陸曹 小谷 悠
 石井 達也
 那須川 洋行
 高谷 文子
 中山 紗奈
 大畑 卓也
 陸士長 榎本 美月

Saxophone

- 陸曹長 本間 将大
 1等陸曹 具志堅 勝尚
 2等陸曹 金子 真土
 3等陸曹 小笠原 良太
 尾形 はるか
 大西 智氏
 陸士長 宇佐美 彩夏

French Horn

- 陸曹長 丹羽 潤一
 2等陸曹 三浦 麻里
 長屋 剛
 上原 佑
 3等陸曹 藤田 翔
 作田 佳菜
 陸士長 佐々木 夕嬉

Trumpet

- 准陸尉 矢口 幸一
 陸曹長 大澤 芳水
 1等陸曹 林 克成
 三浦 剛志
 2等陸曹 角 雅晃
 平木 彩夏
 3等陸曹 田中 翔
 岡野 路子
 (第5音楽隊) 中林 駿介
 陸士長 小野村 楓
 若林 俊介

Trombone

- 1等陸曹 廣實 靖文
 星野 順一
 2等陸曹 林 誠
 吉村 暢気
 佐野 晃彦
 3等陸曹 岩澤 真矢
 野田 真桜

Euphonium

- 1等陸曹 北條 慎一
 2等陸曹 井上 登志弘
 3等陸曹 本橋 宏昭
 雜賀 優

Tuba

- 陸曹長 秋岡 一夫
 1等陸曹 森園 慶宏
 東 洋平
 2等陸曹 小沼 悠貴
 3等陸曹 牧 優吾

Percussion

- 陸曹長 門目 正樹
 馬渡 英一
 1等陸曹 佐久 里恵
 近江 貴広
 2等陸曹 中間 綾美
 小澤 寛行
 3等陸曹 陣内 達雄
 佐藤 雄輝
 戸次 慎治
 (第2音楽隊) 田中 初絵
 陸士長 竹内 夏希

Contrabass

- 2等陸曹 岩渕 陽介
 3等陸曹 永嶋 美礼

Soprano

- 3等陸曹 鶴 真衣

Piano

- 陸士長 三本木 力哉

Harp

- 1等陸士 箱山 輝之介

鼓

- 1等陸佐
 2等陸佐
 3等陸佐
 准陸尉
 陸曹長
 1等陸曹
 2等陸曹
 陸士長
 1等陸士
 2等陸士



陸上自衛隊中央音楽隊

Japan Ground Self Defense Force Central Band

陸上自衛隊中央音楽隊は、1951年(昭和26年)6月、陸上自衛隊の前身である警察予備隊の音楽隊として発足し、以来74年にわたり日本を代表する吹奏楽団として歴史を積み重ねてきた。防衛大臣直轄の音楽隊である中央音楽隊は、国賓・公賓の歓迎行事での特別儀仗演奏を延べ100か国、1,600回以上行い、これらの功績により2015年、「内閣総理大臣特別賞状」を受賞した。また、過去のオリンピックや天皇陛下御即位に伴う祝賀御列の儀など、国家的な行事にも数多く参加し、首都圏で開催される定期演奏会及び室内楽演奏会、全国各地へのコンサート・ツアーやオフィス街におけるコンサートのほか、日本武道館で行われる自衛隊音楽まつり、陸海空自衛隊合同コンサート、21世紀の吹奏楽“響宴”やジャパン・バンド・クリニック、2025大阪・関西万博への出演、CD録音やメディア配信など多彩な演奏活動を行うとともに、全国の陸上自衛隊音楽隊員に対する教育も担当している。更に海外での活動として、韓国(2002年、04年、11年)、フィンランド(2014年)、英国スコットランド(2017年)、ロシア(2019年)、スウェーデン(2024年)、パプアニューギニア(2025年)の各国際軍楽祭への参加や、米陸軍軍楽隊・米海兵隊音楽隊、ドイツ連邦軍参謀軍楽隊との共演、ワシントンD.C.でのABA(全米吹奏楽指導者協会)総会、フランスでの室内楽演奏、ミッドウエスト・バンドクリニックへの出演などを行うとともに、2015年からはパプアニューギニア国防軍軍楽隊、2025年からはジブチ軍楽隊の能力構築支援を行うなど、音楽を通じた国際交流に貢献している。

主な受賞歴

- 第55回文化庁芸術祭優秀賞(2000年、CD「王は受け継がれゆく」フォンテック)
- 第18回日本管打・吹奏楽アカデミー賞「演奏部門」(2008年)
- ジョージS. ハワード大佐顕彰優秀軍楽隊賞(2009年)
- 第50回、第55回レコード・アカデミー賞【特別部門 吹奏楽】(2012年、2017年CD「ベスト・オブ・マーチ2及び3」フォンテック)
- 英国ロイヤル・エディンバラ・ミリタリー・タトゥー 2017「最優秀出演団体賞」受賞



CENTRAL BAND
Japan Ground Self-Defense Force

